



Title	複合語と派生語のアクセント規則
Author(s)	田中, 俊明
Citation	独語独文学科研究年報, 4, 37-64
Issue Date	1978-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25511
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_P37-64.pdf



複合語と派生語のアクセント規則

田 中 俊 明

1. 序

ドイツ語は複合語や派生語などが比較的が多い言語である。換言すれば、造語力の強い言語であると言える。

そこで、本稿では、そのドイツ語の複合語と派生語について、変形生成文法の立場に立ち、特に音韻の面から、それらのアクセントについて考察してみたい。

音韻部門において、各語はまず語幹アクセント規則 (Stammakzentregel=SAR)¹⁾ により、その語幹に第1アクセント、すなわち主アクセントが置かれる。しかし、この第1アクセントは、その後必ずしも維持されるとは限らない。語がより大きな枠組 (例えば、複合語、派生語、句、文など) に入ると、第1アクセントは他の語ないしは形態素との関連で、しばしば第2、第3、…アクセント、すなわち副次アクセントに弱化される。

それゆえ、以後、複合語と句および派生語のアクセントについて考え、²⁾ 次の4つのアクセント規則をたてて、それらの規則の相互関係、並びにアクセントの規則性や特徴について考察してみる。

- (i) アクセント段階規則 (Akzentabstufungsregel=AAR) 3)
- (ii) 副次アクセント弱化規則 (Nebenakzentreduktionsregel=NRR)
- (1) (iii) 副次アクセント交替規則 (Nebenakzentaustauschregel=NAR)
- (iv) アクセント移行規則 (Akzentüberführungsregel=AÜR)

2. アクセント段階規則⁴⁾

第1章でも述べたように、各語はまず第1サイクルで、語幹アクセント規則により、その語幹に第1アクセントが置かれる。そして、第2サイクルに入り、それらの語がいくつか集まり、複合語

ないしは句になる。それゆえ、複合語や句はいろいろな品詞から成り立っている。

まず、2語より成る複合語ないしは句のアクセントは、品詞により次の2種類に分類出来る。

(' は第1アクセント。)

- Hándtasche, Telefónzelle, …… (名詞)
 spazíerengehen, mítkommen, …… (動詞)
 (2) héllbraun, schnéeweiß, …… (形容詞)
 éssen wollen, Bücher lesen …… (動詞句)
- langer Bríef, weißes Pápier …… (名詞句)
 (3) sehr gút, ganz néu, …… (形容詞句)
 heute ábend, morgen frúh, …… (副詞句)

(2)では第1語に、(3)では第2語に第1アクセントが置かれていることがわかる。したがって、このことを規則で表わすと、(2)は規則(4)により、(3)は規則(5)によりそれぞれ示される。

- (4) $[V] \rightarrow [1A] / [X[\bar{1}A]Y]_{N,V,A,VP}$
 条件: Xキ …… [1A] ……
- (5) $[V] \rightarrow [1A] / [X[\bar{1}A]Y]_{NP,AP,AdvP, \dots}$
 条件: Yキ …… [1A] ……

ここで、規則(4)を Handtasche に、また規則(5)を langer Brief に適用してみよう。

- (6) $[N\# + [N\#Hand\#]_{N^+} + [N\#Tasche\#]_{N^+} + \#]_{N^-}$

まず第1サイクルで、(6)に語幹アクセント規則が適用されて、(6)は(7)になる。

- (7) $[N\# + \#H\overset{1}{a}n\overset{1}{d}\# + \#t\overset{1}{a}s\overset{1}{c}h\overset{1}{e}\# + \#]_{N^-}$

次に第2サイクルで、規則(4)が(7)に適用され、(7)は(8)のように分析されて、

$$(8) \quad \left[\begin{array}{c|c} \text{[N\#\#\#H} & \text{a} \\ \text{X} & \end{array} \right] \text{nd\#\#\#t} \overset{1}{\text{ä}} \text{sche\#\#\#} \text{]}_N \text{Y}$$

(9)になる。

$$(9) \quad \text{[N\#\#\#H} \overset{1}{\text{än}} \text{d\#\#\#t} \overset{2}{\text{ä}} \text{sche\#\#\#} \text{]}_N$$

ここで、第2アクセントはさらに第3アクセントに引き下げられるのであるが、それについては第3章で触れることにする。⁵⁾

$$(10) \quad \text{[NP\#[A\#langer\#]}_A \text{[N\#Brief\#]}_N \text{]}_{NP}$$

langer Briefにおいても同様に、第2サイクルで規則(5)が適用され、(11)のように分析されて、

$$(11) \quad \left[\begin{array}{c|c} \text{[NP\#\#\overset{1}{l}anger\#\#\text{Br} & \text{i} \overset{1}{\text{e}} \\ \text{X} & \end{array} \right] \text{f\#\#\#} \text{]}_{NP} \text{Y}$$

最終的に(12)になる。

$$(12) \quad \#\#\overset{2}{l}anger\#\#\text{Br} \overset{1}{\text{i}} \text{f\#\#\#}$$

さて、3語以上より成る複合語をいしは句のアクセントも、規則(4)または(5)をくり返し適用することにより得られる。例として、Neujahrsabend と sehr schönes Mädchenにそれぞれ規則(4)ないしは(5)を適用してみよう。

(13) (((neu)(Jahrs))(Abend))				
第1サイクル	(1)	(1)	(1)	SAR
第2サイクル	(1	2)		R (4)
第3サイクル	(1	3	2)	R (4)
	(1	4	3)	R ? ⁶⁾
	1	4	3	

(14)	(((sehr)(schönes))(Mädchen))			
第1サイクル	(1)	(1)	(1)	SAR
第2サイクル	(2	1)		R (5)
第3サイクル	(3	2	1)	R (5)
	(2	3	1)	R?? ⁷⁾
	2	3	1	

次の句(15)は確かに3語より成っているが、どのようなアクセントを持っているであろうか。

(15) [PP#vor [NP#[A#kürzer#]_A [N#Zeit#]_N]_{NP}] PP

(15)に、第1サイクルで語幹アクセント規則が適用され、第2サイクルで規則(5)が適用されると、(15)は(16)になる。

(16) [PP#vor#kürzer##Zeit###] pp

(16)ではまだ最も外側の括弧が残っているので、第3サイクルで(16)に規則(5)がもう1度適用されねばならないように思われる。しかしながら、規則(5)の適用後のアクセントは *vor kürzer Zeit¹ となり、事実と反する。正しいアクセントは、(16)と全く等しい vor kürzer Zeit¹ である。

では、このアクセントを付ける過程で、一体どこが間違っているのであろうか。規則(5)を(16)に適用すると、(16)は次のように分析される。

(17) [PP#vor##kürzer##Z	e	i t###] pp
X		Y

ここで、(17)を(14)と比較したいので、第3サイクルで規則(5)の適用の際の名詞句 sehr schönes Mädchen の分析を示しておく。

(18) [NP###s ² ehr##schönes###M	ä	dchen##] NP
X		Y

(17)と(18)より、(18)ではXに第1アクセントが含まれているが、(17)ではそれが含まれていないことがわかる。それゆえ、(18)のようにXが少なくとも1つの第1アクセントを含んでいる時だけ、規則(5)が適用され、(17)のようにXが第1アクセントを含まない時は適用されないとすれば、正しく規則が働くことになる。したがって、条件 $X = \dots [1A] \dots$ が規則(5)に付け加えられなければならない。また、規則(5)の適用前には、句は高々2つの第1アクセントしか含まないので、条件 $Y \text{キ} \dots [1A] \dots$ は不要である。結局、規則(5)は次のように修正される。

$$(19) \quad [V] \rightarrow [1A] / [X[\overline{1A}]Y]_{NP, AP, AdvP}, \dots$$

条件： $X = \dots [1A] \dots$

今まで、文法範疇に依存した複合語と句に対する2つのアクセント規則、すなわち規則(4)と(19)を別々にたててみた。この2つのアクセント規則は、共に排反的順序を持ち、それらの適用の文法範疇は互いに補足的である。それゆえ、規則の簡潔性という観点から見ると、出来ればそれらの規則を1つにまとめた方がよいと言える。

しかし、規則(4)を規則(19)と比較すると、それら2つの規則の条件が互いに矛盾することに気がつく。したがって、何の修正もせずに、それら2つのアクセント規則を1つにすることは出来ない。そこで、規則(4)が適用されている(8)において、Yをさらに次のようにYとZに分けてみる。

$$(20) \quad \begin{array}{|c|} \hline [N\#\#\#H] \\ \hline X \\ \hline \end{array} \begin{array}{|c|} \hline \overset{1}{a} \\ \hline nd \\ \hline Y \\ \hline \end{array} \begin{array}{|c|} \hline \#\#\#\# \\ \hline t\overset{1}{a}sche\#\#\# \\ \hline Z \\ \hline \end{array}]_N$$

ここで、Yは第1アクセントを含まないが、Zは第1アクセントを1つ含むことがわかる。それゆえ、規則(4)は次のように修正出来る。

$$(21) \quad [V] \rightarrow [1A] / [X[\overline{1A}]Y\#(++)\#Z]_{N, V, A, VP}^{8)}$$

条件： $Z = \dots [1A] \dots$

以上のことから、規則(21)と(19)は次のように1つにまとめることが出来る。

$$(22) \quad [V] \rightarrow [1A] / [X[\overline{1A}]Y\langle\#(++)\#Z\rangle]_{\langle N, V, A, VP \rangle}^{9)}$$

条件：a) $Z = \dots [1A] \dots$

b) もし $Z = \phi$ ならば、 $X = \dots [1A] \dots$

この規則をアクセント段階規則 (Akzentabstufungsregel=AAR) と呼ぶことにする。ここで、アクセント段階規則(22)について、補足的に説明を加えておく。規則(22)は次の2つのアクセント規則に展開出来る。

(a) アクセント段階規則 A

$$[V] \rightarrow [1A] / [X[\bar{1}A]Y\#(++)\#Z]_{N, V, A, VP}$$

条件: Z=...[1A]...

(23)

(b) アクセント段階規則 B

$$[V] \rightarrow [1A] / [X[\bar{1}A]Y]$$

条件: X=...[1A]...

ここで注目すべきことは、アクセント段階規則 Bにおいて、適用される文法範疇の指示がないことである。したがって、この規則の適用される文法範疇が、名詞、動詞、形容詞、動詞句にまで拡張されているので、これらの文法範疇の例外の処理に大きな役割を果たすのである。例えば、分離・非分離の「前つづり」¹⁰⁾ durch, hinter, über, um, unter, voll, wider, wieder を持つ非分離動詞を考えてみる。

(24) durchschnéiden, hintersinnen, übersehen, umréißen,
unterbáuen, vollénden, widerspréchen, wiederhólen, ...

これらの語は、動詞の範疇にあるにもかかわらず、規則(19)によって得られるアクセントと同じアクセントを持つのであるが、規則(19)で動詞を扱うことは出来ない。しかし、規則(22)を展開して得られた規則(23(b))には適用する文法範疇の指示がないので、あらかじめ(24)の語にアクセント段階規則 A (23(a))に対してマイナスの指示を与えておけば、自動的にアクセント段階規則 B (23(b))が適用されて、正しいアクセントが得られることになる。

最後に、名詞や形容詞における同様の例を挙げておく。

(25) Langewéile, Jahr hundert, Hohepriester, ...
vollkómmen, barmhérzig, willkómmen, ...

3. 副次アクセント弱化規則¹¹⁾

各語はまず第1サイクルで語幹アクセント規則により、その語幹に第1アクセントが置かれる。そして、その語が複合語や句になると、第2サイクルでアクセント段階規則により、第1アクセントを持つ分節素の1つに、さらに第1アクセントが置かれ、他のアクセントはそれぞれ1段ずつ引き下げられた。そして、もしそれが複合語などのように、語のレベルであるならば、その副次アクセントはもう1度1段ずつ引き下げられるのである。換言すれば、第1アクセントにもう1度第1アクセントを与えれば、自動的に第2アクセント以下の副次アクセントはすべて1段ずつ引き下げられることになる。このことを規則化すると次のようになる。

$$(26) \quad [V] \rightarrow [1A] / [X[\bar{1}\bar{A}]Y]$$

条件：この規則は語のレベルでのみ適用される。

この規則を副次アクセント弱化規則(Nebenakzentreduktionsregel=NR)と呼ぶ。ここで注目すべきことは、条件で述べられているように、副次アクセント弱化規則(26)は語のレベルでのみ適用出来るのであって、例えば句や文には適用出来ないということである。そこで、*stehen bleiben* と *stehen bleiben* を例にこのことを考えてみよう。

まず、これらは次のような構造を持っている。

$$(27) \quad (a) \quad [V\#\#[V\#stehen\#]_{V\#\#}\#[V\#bleiben\#]_{V\#\#}]_V$$

$$(b) \quad [VP\#[V\#stehen\#]_{V\#\#}\#[V\#bleiben\#]_{V\#\#}]_{VP}$$

最初に、語幹アクセント規則によりそれぞれの語幹に第1アクセントが置かれる。

$$(28) \quad (a) \quad [V\#\#\overset{1}{s}t\overset{1}{e}h\overset{1}{e}n\#\#\overset{1}{b}l\overset{1}{e}i\overset{1}{b}e\overset{1}{n}\#\#\#]_V$$

$$(b) \quad [VP\#\#\overset{1}{s}t\overset{1}{e}h\overset{1}{e}n\#\#\overset{1}{b}l\overset{1}{e}i\overset{1}{b}e\overset{1}{n}\#\#\#]_{VP}$$

次に第2サイクルで、(28)(a)ないし(b)にアクセント段階規則が適用されて、(29)(a)ないし(b)になる。

$$(29) \quad (a) \quad [V\#\#\overset{1}{s}t\overset{1}{e}h\overset{1}{e}n\#\#\overset{2}{b}l\overset{2}{e}i\overset{2}{b}e\overset{2}{n}\#\#\#]_V$$

$$(b) \quad [VP\#\#\overset{1}{s}t\overset{1}{e}h\overset{1}{e}n\#\#\overset{2}{b}l\overset{2}{e}i\overset{2}{b}e\overset{2}{n}\#\#\#]_{VP}$$

ここで規則(26)を(29(a)ないし(b)に適用したいのであるが、(29(b)には適用出来ない。なぜなら、*stehen bleiben* は(29(b)においてそれ自身の中に1つの *Terminus* を含んでいるので、¹²⁾すでに語のレベルを越えて(すなわち句になって)いるからである。したがって、規則(26)は(29(a)にのみ適用されて、(27(a)ないし(b)は最終的に次のアクセントを得る。

- (30) (a) #+#s¹tēhen#++#bl³ēiben#+#
 (b) ##st¹ēhen##bl²ēiben##

以上のことは、文法範疇の相違が、副次アクセントの相違を引き起こしている例と言える。同様の例が、*rad¹fah³ren* と *Auto¹fah²ren*, *spaz¹ier³eng³ehen* と *e¹ink⁴auf²en gehen* にも見られる。¹³⁾

最後に、規則(26)を名詞句 *Armvoll Blumen* と *Arm voll Blumen* に適用してみる。¹⁴⁾

- (31) [NP#[N#[N#Arm#]_N++[A#voll#]_A+#]_N{N#Blumen#}_N#]_{NP}
 (((Arm)(voll))(Blumen)))

第1 サイクル	(1) (1) (1)	SAR
第2 サイクル	(1) (2)	AAR
	(1) (3)	NRR
第3 サイクル	(2) (4) (1)	AAR
	2 4 1	

- (32) [NP#[N#Arm#]_N[AP#[A#voll#]_A{N#Blumen#}_N#]_{AP}#]_{NP}
 (((Arm)((voll)(Blumen))))

第1 サイクル	(1) (1) (1)	SAR
第2 サイクル	(2) (1)	AAR
第3 サイクル	(2) (3) (1)	AAR
	2 3 1	

(31) では *Armvoll* が(複合)語であるので、副次アクセント弱化規則が適用されるが、(32)では *Arm* と *voll* はそれぞれ独立した語であるので、*Arm voll* にそれが適用されることはない。したがって、ここでも文法範疇の相違により、*voll* のアクセントの価が異なっていることを示している。

4. 副次アクセント交替規則

今まで見てきたように、アクセント段階規則により、複合語ないしは句に第1アクセントが置かれ、さらに複合語では、副次アクセント弱化規則により、副次アクセントはそれぞれ1段ずつ引き下げられる。しかし、一般にこれら2つのアクセント規則だけで副次アクセントが現われるのではない。すなわち、これらのアクセント規則だけでは説明しきれない副次アクセントが、いろいろな環境や条件において見られるのである。

それゆえ、この章では、前章で取り扱った以外の副次アクセントについて考察してみる。まず、複合語の例として、名詞 *Mittelhochdeutsch* を考えてみると、その表層構造は次のようである。

$$(33) \quad [N\#[A\#mittel\#]_A]^{++} [N\#[A\#hoch\#]_A]^{++} [N\#[Deutsch\#]_N]^{++} [N\#]_N]_N$$

したがって、*Mittelhochdeutsch* は、理論的には次のようなアクセントを持つはずである。

(34)	((mittel)((hoch)(Deutsch)))	
第1サイクル	(1) (1) (1)	SAR
第2サイクル	(1 2)	AAR
第3サイクル	(1 2 3)	AAR
	(1 3 4)	NRR
	1 3 4	

しかし、実際には、最終的なアクセントは $Mittelhochdeutsch$ であり、hoch と deutsch のアクセントの価が交替している。

その理由は、一般的には、ドイツ語の音声体系、すなわちドイツ語のリズムから生じたと推測出来る。例えば、(34)の第3サイクルでのアクセント段階規則適用後は、3つアクセントが強い順に、つまり第1、第2、第3アクセントの順に並んでいる。しかし、ドイツ語は主に強弱強弱……という動的アクセントを持っているので、hochよりはむしろ deutsch により強いアクセントが置かれるのである。

したがって、次のように説明出来る。すなわち、アクセント価2を持つリズムの副次アクセントが deutsch に置かれれば、自動的に hoch の第2アクセントは第3アクセントに引き下げられ

る。

(35) [N#++#Mittel#+++##hoch#+++#deutsch#++##]N

そして、最後に副次アクセント弱化規則が適用されて、Mittelhochdeutschとなる。

また、この副次アクセントの交替は、語のレベルを越えて、句においても見られる。¹⁵⁾例えば、Bücher einkaufen と schön aussehen は次のアクセントをもつはずである。

(36) (a) *Bücher einkaufen
(b) *schön aussehen

しかし、上述の理由から、この2つの動詞句は、実際にはしばしば次のアクセントを持つ。

(37) (a) Bücher einkaufen
(b) schön aussehen

今まではアクセントが強い順にならんでいる場合を見てきたが、今度は逆に、アクセントが弱い順に並んでいる場合を考察してみよう。この場合は、例えば名詞句や形容詞句の文法範疇で起こり得る。すなわち、名詞句 sehr schönes Mädchen と形容詞句 ganz wohl möglich は、それぞれ (38)(a)ないしは(b)のアクセントを持つはずであるが、

(38) (a) sehr schönes Mädchen
(b) ganz wohl möglich

実際には、(39)(a)ないしは(b)のアクセントを持っている。

(39) (a) sehr schönes Mädchen
(b) ganz wohl möglich

ここでも、リズムのために副次アクセントが交替している。

以上のことをまとめると、次のようになる。第1アクセントを持つ分節素の直前(ないしは直後)のアクセントのある分節素が第2アクセントを持つならば、そのまた直前(ないしは直後)のアクセ

ントのある分節素に、アクセント価2のリズムの副次アクセントが置かれる。したがって、次の副次アクセント交替規則(Nebenakzentauschregel=NAR)がたてられる。

$$(40) \quad \left[\begin{array}{c} V \\ \alpha A \end{array} \right] \rightarrow \{ 2A \} / \{ X _ [-A] \circ \{ 2A \} [-A] \circ \} \{ 1A \} \{ [-A] \circ \{ 2A \} [-A] \circ _ \} Y \}^{16)}$$

条件: $\alpha = 2, 3, \dots$

また、この規則(40)に少し説明を加えれば、規則(40)は次の規則(41)~(43)に展開出来る。

$$(41) \quad \left[\begin{array}{c} V \\ \alpha A \end{array} \right] \rightarrow \{ 2A \} / \{ X _ [-A] \circ \{ 2A \} [-A] \circ \{ 1A \} [-A] \circ \{ 2A \} [-A] \circ _ Y \}$$

条件: $\alpha = 2, 3, \dots$

$$(42) \quad \left[\begin{array}{c} V \\ \alpha A \end{array} \right] \rightarrow \{ 2A \} / \{ X _ [-A] \circ \{ 2A \} [-A] \circ \{ 1A \} Y \}$$

条件: $\alpha = 2, 3, \dots$

$$(43) \quad \left[\begin{array}{c} V \\ \alpha A \end{array} \right] \rightarrow \{ 2A \} / \{ X \{ 1A \} [-A] \circ \{ 2A \} [-A] \circ _ Y \}$$

条件: $\alpha = 2, 3, \dots$

この3つの規則は、もちろん排反的顺序を持つ。また、これらの線型順序は、まず規則(41)が規則(42)をいし(43)より先に適用される。ただし、規則(42)と(43)の線型順序はない。

5. アクセント移行規則¹⁷⁾

一般に、非分離前つづりには次の8つがある。

$$(44) \quad be-, emp-, ent-, er-, ge-, ver-, zer-, mi\beta-$$

しかし、このうち $mi\beta-$ は他の7つの非分離前つづりと次の点で異なっている。すなわち、(44)の前つづりのうち、 $mi\beta-$ 以外の前つづりには第1アクセントが置かれることはあり得ないが、 $mi\beta-$ には第1アクセントが置かれる場合もあり得る。その場合、 $mi\beta-$ と他の非分離前つづりが、同一の語内で共存し得る。

$$(45) \quad mi\beta f\grave{a}llen, mi\beta br\grave{a}uchen, mi\beta l\grave{i}ngen, mi\beta r\grave{a}ten, mi\beta tr\grave{a}uen, \dots$$

$$(46) \quad mi\beta behagen, mi\beta belieben, mi\beta gestalten, mi\beta interpretieren, \dots$$

$mi\beta\overset{1}{v}er\overset{1}{s}tehen, \dots$

第1アクセントが、(45)では語幹にあるが、(46)では $mi\beta-$ に置かれている。(46)の各語から $mi\beta-$ を取り去った語形は(47)であり、ここでは第1アクセントが語幹に置かれている。

(47) $beh\overset{1}{a}gen, belie\overset{1}{b}en, gest\overset{1}{a}lten, inter\overset{1}{p}retieren,$
 $ver\overset{1}{s}tehen, \dots$

したがって、(45)の各語は $mi\beta-$ の有無にかかわらず、第1アクセントは語幹にあり、移行は起こっていないが、(47)の各語に前つづり $mi\beta-$ が付加されると、第1アクセントが語幹から $mi\beta-$ に移行していることがわかる。

(45)と(46)から音声学的な差違を考えると、次のことが明らかになる。すなわち、(45)の各語では、 $mi\beta-$ の直後の音節に第1アクセントがあるが、(46)の各語では、 $mi\beta-$ の直後の音節にはアクセントがない、したがって $[-Akzent]$ (= $[-A]$)という素性を持っている。

以上のことから、語幹から $mi\beta-$ への第1アクセントの移行を規則化すると次のようになる。

(48) $[V] \rightarrow [1A] / [\# + [K] _ [K] ++ \# + [K] _ \overset{1}{V} _ [A] X] \overset{18}{V}$

今までは前つづり $mi\beta-$ を持つ動詞の第1アクセントの移行について調べてきたが、名詞や形容詞においても同様の現象がある。すなわち、(45)の動詞は第1アクセントが $mi\beta-$ に移行することはなかったが、これらの動詞が名詞ないしは形容詞に派生されると、第1アクセントが $mi\beta-$ ($Mi\beta-$)に移行するのである。

(49) (a) $Mi\beta\overset{1}{f}\overset{3}{a}llen, Mi\beta\overset{1}{b}r\overset{3}{a}uch, Mi\beta\overset{1}{t}r\overset{3}{a}uen, \dots$ (名詞)
 (b) $mi\beta\overset{1}{f}\overset{3}{a}llig, mi\beta\overset{1}{b}r\overset{3}{a}uchlich, mi\beta\overset{1}{t}r\overset{3}{a}uisch, \dots$ (形容詞)

このことを規則化すると次のようになる。

(50) $[V] \rightarrow [1A] /$
 $[\# + \# + [K] _ [K] ++ \# [K] _ \overset{V}{1A} Y] \overset{19}{N, A}$

ここで、規則(48)と(50)は排反的順序を持ち、適用の文法範疇が互いに補足的であるので、次のよ

うに1つにまとめることが出来る。

$$(51) \quad [V] \rightarrow [1A] / \left\{ \begin{array}{l} +[K]_0^1 [\begin{array}{l} V \\ -A \end{array}] X_V \\ [K]_0 [\begin{array}{l} V \\ 1A \end{array}] Y_{N,A} \end{array} \right\}$$

以上で、動詞、名詞、形容詞における、語幹から前つづり *miβ* への第1アクセントの移行が規則化されたことになる。

ここで、話を一歩進めてみる。第2章で述べた分離・非分離の「前つづり」を持つ動詞(24)においても、そこから派生された名詞、形容詞では、*miβ* - の場合と同様の第1アクセントの移行が見られる。

	<i>durchschnéiden</i>	→	<i>Dürchschnitt</i>
(52)	<i>hintersinnen</i>	→	<i>hintersinnig</i>
	<i>überséhen</i>	→	<i>Übersicht</i>
	<i>umrèißen</i>	→	<i>Umriß</i>
	<i>unterbâuen</i>	→	<i>Únterbau</i>
	<i>widerspréchen</i>	→	<i>Widerspruch</i>

これらの分離・非分離の「前つづり」を持つ動詞は、複合語と見なされて、第2章でアクセント段階規則によりアクセントが付けられたが、そこから派生された名詞、形容詞のアクセントについてはまだ規則化されていない。そこで、規則(51)を修正して、(52)を規則化出来ないかどうかを検討してみる。

まず、分離・非分離の「前つづり」*durch, hinter, über, um, unter, voll, wider, wieder* は、アクセントの置かれる可能性のある下線が引かれた母音を除き、弱化された $e[\text{ə}]^{20)}$ が子音であり、これらにはアクセントが置かれることはない。したがって、弱化された e と子音に $[+unbetonbar] (= [+UB])$ という素性を与えることが出来る。

そこで、分離・非分離の「前つづり」を持つ動詞から派生した名詞、形容詞の第1アクセントを規則化すると次のようになる。

$$(53) \quad [V] \rightarrow [1A] / \left\{ \begin{array}{l} \#[\#]\#[\#]\#[K]_0^1 [+UB]_1^4 \#[\#]\#[\#]\#[K]_0 [\begin{array}{l} V \\ 1A \end{array}] Y_{N,A} \end{array} \right\}^{21)}$$

ここで、 $mi\beta$ -も $\{K\}_0^1[-UB]_1^4$ にあてはまるので、規則(51)は次のように書き換えられる。

$$(54) \quad \{V\} \rightarrow \{1A\} / \left\{ \begin{array}{l} +\{K\}_0^1[-A]X_V \\ \{K\}_0^1[-A]Y_{N,A} \end{array} \right\}$$

したがって、規則(53)と(54)を次のように1つにまとめることができる。

$$(55) \quad \{V\} \rightarrow \{1A\} / \left\{ \begin{array}{l} +\{K\}_0^1[-A]X_V \\ \{K\}_0^1[-A]Y_{N,A} \end{array} \right\}$$

この規則をアクセント移行規則 (Akzentüberführungsregel=AÜR) と呼ぶ。

以上のことをまとめてみると、規則(55)は、動詞において第1アクセントを $mi\beta$ -に移行させ、名詞、形容詞において第1アクセントを $mi\beta$ -ならびに $durch-$, $hinter-$, $über-$, $um-$, $unter-$, $voll-$, $wider-$, $wieder-$ に移行させる規則である。ただし、 $widersätzlich$ (\leftarrow widersetzen) のような語に対しては、あらかじめ [-アクセント移行規則] の指定をしておかなければならない。

6. アクセント規則の線型順序

本章では、今まで扱った4つのアクセント規則の最終的な形を再掲し、それらの適用の際の線型順序をつけてみることにより、アクセント規則の特徴をまとめてみたい。

アクセント段階規則(22)

$$(56) \quad \{V\} \rightarrow \{1A\} / [X[-]_1A] Y \langle \#(++)\#Z \rangle \langle N, V, A, VP \rangle$$

条件: a) $Z = \dots \{1A\} \dots$
 b) もし $Z = \phi$ ならば、 $X = \dots \{1A\} \dots$

副次アクセント弱化規則(26)

$$(57) \quad \{V\} \rightarrow \{1A\} / [X[-]_1A] Y$$

条件: この規則は語のレベルでのみ適用される。

副次アクセント交替規則 (40)

$$(58) \quad \left[\begin{matrix} V \\ \alpha A \end{matrix} \right] \rightarrow [2A] / \left[X \left(\left[-A \right]_0 [2A] \left[-A \right]_0 \right) \left[1A \right] \left(\left[-A \right]_0 [2A] \left[-A \right]_0 \right) Y \right]$$

条件: $\alpha = 2, 3, \dots$

アクセント移行規則 (55)

$$(59) \quad [V] \rightarrow [1A] /$$

$$\left[\#(+\#) + (\#) [K] \begin{matrix} 1 \\ 0 \end{matrix} \left[+UB \right]_1^4 (\#) ++\# \left\{ \begin{matrix} +[K] \begin{matrix} 1 \\ 0 \end{matrix} \left[\begin{matrix} V \\ -A \end{matrix} \right] X \end{matrix} \right\}_V \right\} \left[[K] \begin{matrix} 1 \\ 0 \end{matrix} \left[\begin{matrix} V \\ 1A \end{matrix} \right] Y \right]_{N,A} \right]$$

まず、アクセント段階規則およびアクセント移行規則により、副次アクセントが決められていなければ、2つの副次アクセント規則が適用される環境にはなっていない。したがって、

(60) アクセント段階規則およびアクセント移行規則は、副次アクセント弱化規則および副次アクセント交替規則の前に適用されなければならない。

次に、副次アクセント弱化規則と副次アクセント交替規則の順序を決定しなければならないが、これは、語のレベルでは副次アクセントはそれぞれ1段ずつ引き下げられるという副次アクセント弱化規則の根本原理より明らかである。換言すれば、この規則は語のレベルで、最終的に第1アクセントと第2アクセントの共存を避ける規則である。したがって、

(61) 副次アクセント交替規則は、副次アクセント弱化規則の前に適用されなければならない。

最後に、アクセント段階規則とアクセント移行規則の線型順序であるが、まず次の派生語を考えてみる。

- (62) (a) *hintersinnig*
(b) *Unterbau*

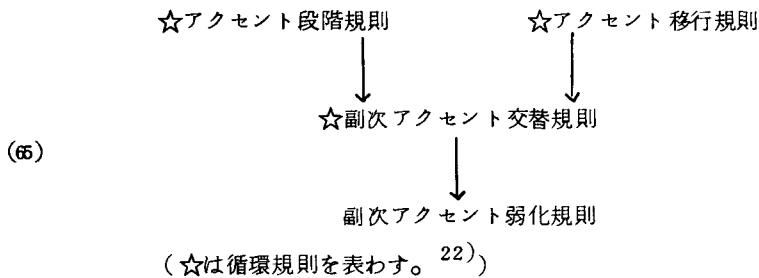
これらの派生語 (62)(a)および(b)は、次の表層構造を持っている。

- (63) (a) $[A\# + [V\# + [P\# \text{hinter}\#]_P ++ [V\# \text{sinn}\#]_{V\#} ++ \text{ig}\#]_A$
(b) $[N\# [V\# + [P\# \text{unter}\#]_P ++ [V\# \text{bau}\#]_{V\#} ++ \#]_{V\#}]_N$

(63)(a)および(b)より、複合動詞 *hintersinnen* ないしは *unterbauen* とそこから派生した形容詞 *hintersinnig* ないしは名詞 *Unterbau* は、それぞれ同一サイクルでは存在しないことが明らかである。すなわち、アクセント段階規則とアクセント移行規則は、同一サイクルで適用されることはない。したがって、

(64) アクセント段階規則とアクセント移行規則の線型順序はつけられない。

以上、(60)、(61)、(64)より、次のようなアクセント規則の線型順序が付けられる。



では、これら4つのアクセント規則すべてが適用される例として、*Lebensumstände* を挙げておく。

(66) $[N\#+[N\#[V\#leb\#]_V++en++s+\#]_N++[N\#[V\#[P\#um\#]_P++[V\#s\ t\ ä\ n\ d\ \#]_V++\#]_V++e+\#]_N++\#]_N$

(67)

	(((lebens)((um)(ständ))e))			
第1サイクル	(1)	(1)	(1)	SAR
第2サイクル	()	(2)	(1)	AAR
第3サイクル	()	(1)	(2)	AÜR
第4サイクル	(1)	(2)	(3)	AAR
	(1)	(3)	(2)	NAR
	(1)	(4)	(3)	NRB
	1	4	3	

(— は当該のサイクルで、適用されるアクセント規則がないことを示す。)

7. 3語および4語より成る複合名詞のアクセント²³⁾

前章において、本稿で扱った4つのアクセント規則の適用の際の線型順序がつけられたので、本章ではそのことも考慮に入れて、3語および4語より成る複合名詞の造語構造とアクセントとの関係を考えてみる。

まず、3語より成る複合名詞には、次の2つの型がある。

- (a) ((AB)C)型
 Neujahrskarte, Sprachwissenschaft, ...
- (68) (b) (A(BC))型
 Mittelhochdeutsch, Handwörterbuch, ...

これらの複合語のアクセントは、本稿で扱ったアクセント規則をくり返し適用することにより得られる。((AB)C)型の例としてNeujahrskarte, (A(BC))型の例としてMittelhochdeutschを挙げておく。

(69) ((AB)C)型

	(((neu)(Jahrs))(Karte))				
第1サイクル	(1)	(1)	(1)		SAR
第2サイクル	(1 2)				AAR
第3サイクル	(1 3	2)		AAR
	(1 4	3)		NRR
	1	4	3		

(70) (A(BC))型

	((mittel)((hoch)(Deutsch)))				
第1サイクル	(1)	(1)	(1)		SAR
第2サイクル	1	(1 2)			AAR
	(1	2	3)	AAR
第3サイクル	(1	3	2)	NAR
	(1	4	3)	NRR
	1	4	3		

(70)では、第3サイクルで副次アクセント交替規則が適用されているので、(69)とアクセントが一致することになる。したがって、一般的に、3語より成る複合名詞は、型に関係なく常に143のアクセントを持つことになる。

では次に、4語より成る複合名詞を考察してみると、造語構造上次の5つの型に分類出来る。

- (a) ((AB)(CD))型
Frémdsprachenhochschule, Stráß**en**bahnfahrkarte,・・・
- (b) (((AB)C)D)型
Né**ben**akzentreduktionsregel, Á**n**fangsakzentregel,・・・
- (71) (c) ((A(BC))D)型
Á**l**thochdeutschlehrer, Lú**ft**abwehrkanone,・・・
- (d) (A((BC)D))型
Br**ie**f**au**f**g**abestempel, Bú**nd**esausgleichsamt,・・・
- (e) (A(B(CD)))型
Frú**h**neuhochdeutsch, Poliz**e**i**h**aup**t**wachtmeister,・・・

ここで、各型より1つずつ例を用いて、それぞれのアクセントを示してみる。

(72) ((AB)(CD))型

	(((fremd)(Sprachen))((hoch)(Schule)))												
第1サイクル	(1)	(1)	(1)	(1)	SAR
第2サイクル	(1	2)	(1	2)	AAR				
第3サイクル	(1	3	2	3)	AAR						
	(1	4	3	4)	NRR						
		1	4	3	4								

(73) (((AB)C)D)型

	(((neben)(Akzent))(Reduktions))(Regel))												
第1サイクル	(1)	(1)	(1)	(1)	SAR
第2サイクル	(1	2)	AAR								
第3サイクル	(1	3	2)	AAR							
第4サイクル	(1	4	3	2)	AAR						
	(1	5	4	3)	NRR						
		1	5	4	3								

(74) ((A(BC))D)型

(((alt)((hoch)(Deutsch)))(Lehrer))					
第1 サイクル	(1)	(1)	(1)	(1)	SAR
第2 サイクル	(1 2)				AAR
第3 サイクル	(1 2 3)				AAR
	(1 3 2)				NAR
第4 サイクル	(1 4 3 2)				AAR
	(1 5 4 3)				NRR
	1	5	4	3	

(75) (A((BC)D))型

((Brief)(((auf)(gabe))(Stempel)))					
第1 サイクル	(1)	(1)	(1)	(1)	SAR
第2 サイクル	(1 2)				AAR
第3 サイクル	(1 3 2)				AAR
	(1 2 4 3)				AAR
第4 サイクル	(1 3 2 4)				NAR
	(1 4 3 5)				NRR
	1	4	3	5	

(76) (A(B(CD)))型

(((früh)((neu)((hoch)(Deutsch))))					
第1 サイクル	(1)	(1)	(1)	(1)	SAR
第2 サイクル	(1 2)				AAR
第3 サイクル	(1 2 3)				AAR
	(1 3 2)				NAR
	(1 2 4 3)				AAR
第4 サイクル	(1 3 2 4)				NAR
	(1 4 3 5)				NRR
	1	4	3	5	

((AB)(CD))型は3サイクル必要とし、4サイクルを必要とする他の型と異なっている。そしてまた、((AB)(CD))型は2語より成る2つの複合語の複合語であるので、そのアクセントは3語より成る複合名詞のアクセントとはほとんど無関係である。

しかし、他の4つの型のアクセントは、3語より成る複合名詞のアクセントと密接な関係がある。すなわち、(((ABC)D)型ないしは(A(BC))D)型は、構造上((AB)C)型ないしは(A(BC))型とその後に加された1つの語から成り立っている。したがって、前に述べたように、3語より成る複合名詞の2つの型のアクセントが等しいので、当然、(((ABC)D)型と(A(BC))D)型のアクセントは一致することになる。

同様に、(A((BC)D))型ないしは(A(B(CD)))型は、構造上3語より成る複合名詞の2つの型のうちの1つとその前に付加された1つの語から成り立っている。したがって、上述の理由から、4語より成るこの2つの型の複合名詞のアクセントは一致するのである。

以上のことをまとめてみると、4語より成る複合名詞は、((AB)(CD))型を除き、3語より成る複合名詞より派生しているので、アクセントも3語より成る複合名詞のアクセントに基づいていると言える。

8. ま と め

今まで複合語と句および派生語に対する4つのアクセント規則をたてて、それらの線型順序を決め、また規則を具体的に例に適用させて、アクセントの規則性について考察してきた。そこで最後に、それらのことから明らかになった点をいくつかまとめてみることにする。

第3章と第4章で副次アクセントの弱化と交替について考え、規則化した。まず、この2つの規則と3語より成る句のアクセントとの関連について考えてみる。

3語より成る複合語には((ABC)型と(A(BC))型の2つの型があり、どちらのアクセントも143であった。では、句の場合はどうなるであろうか。句でも、もちろん((AB)C)型と(A(BC))型の2つの型がある。

そこで、3語より成る句で、その3語がみな独立した語である場合は、((AB)C)型も(A(BC))型もどちらも132のアクセントを持つ。

(77) ((AB)C) 型

stehen bleiben wollen			
第1サイクル	(1)	(1)	(1) SAR
第2サイクル	(1	2)	AAR
第3サイクル	(1	3 2)	AAR
	1	3	2

(A(BC)) 型

schnell Auto fahren			
第1サイクル	(1)	(1)	(1) SAR
第2サイクル	1	2)	AAR
第3サイクル	(1	2 3)	AAR
	(1	3 2)	NAR
	1	3	2

しかし、3語のうちの2語が1つの複合語を作っているときは、この2つの型の句のアクセントは一致しない。

(78) ((AB)C) 型

stehenbleiben wollen			
第1サイクル	(1)	(1)	(1) SAR
第2サイクル	(1	2)	AAR
	(1	3)	NRR
第3サイクル	(1	4 2)	AAR
	1	4	2

(A(BC)) 型

schnell radfahren			
第1サイクル	(1)	(1)	(1) SAR
第2サイクル		(1	2) AAR
		(1	3) NRR
第3サイクル	(1	2 4)	AAR
	(1	3 2)	NAR
	1	3	2

その原因は(78)から明らかなように、どちらの句も複合語を含むので、第2サイクルで副次アクセント弱化規則が適用されている。そして、第3サイクルで、(A(BC))型では副次アクセント交替規則により、第4アクセントが第2アクセントに「回復」されているが、((AB)C)型ではその規則が適用されず、第4アクセントはそのまま最後まで残ってしまうことにある。このことは、副次アクセント交替規則がすべての文法範疇に適用され得るのに対し、副次アクセント弱化規則はその適用の文法範疇が語のレベルに限られているという相違に基づいているからである。

次に、複合語と派生語のアクセントと表層構造との関連についてまとめてみよう。

アクセントは表層構造に置かれるのであるから、直接には深層構造との関係は薄い。

(79) die Übersetzung von Goethe

(79)が少なくとも二義的であることは明白であろう。²⁴⁾ すなわち、(79)は少なくとも2つの深

層構造を持ち、それらから変形規則により同一の表層構造(80)が生成されると考えられる。

(80) ((die(((über)(setz)))ung))(von(Goethe)))

この場合は、深層構造の相違が、表層構造の相違もアクセントの相違も引き起こしていない。

しかし、場合によっては、深層構造の相違が上述の相違を引き起こすこともあり得る。

(81) das Interesse des Ministers für gesamtdeutsche Fragen

(81)には少なくとも次の2つの意味がある。

- (82) (a) das Interesse, das der Minister für Gesamtdeutsche Fragen hat²⁵⁾
 (b) das Interesse für gesamtdeutsche Fragen, das der Minister hat

(82)aの意味を持つ場合には、(81)は次の表層構造とアクセントを持つ。

(83) ((das(Interesse))(des(Ministers))(für(((Gesamt)(deutsche))(Fragen))))

第1サイクル	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	SAR
			(1 2)			AAR
第2サイクル			(1 3)			NRR
	()	()				—
第3サイクル			(2 4 1)			AAR
第4サイクル			()			—
第5サイクル		(2	3 5	1)		AAR
第6サイクル	(2	3	4 6	1)		AAR
	2	3	4 6	1		

また、(82)bの意味を持つ場合には、(81)は次の表層構造とアクセントを持つ。

(84) (((das(Interesse))(des(Ministers)))(für(((gesamt)(deutsche))(Fragen))))

第1サイクル	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	SAR
			(1)	2		AAR
第2サイクル			(1)	3		NRR
	()	()				—
第3サイクル	(2	1)	(2	4	1)	AAR
第4サイクル			()			—
第5サイクル	(3	2	3	5	1)	AAR
	3	2	3	5	1	

この場合は、異なった表層構造が異なったアクセントを産み出していることを示している。

このように、複合語や派生語および句などのアクセントは、直接的には表層構造に、間接的には深層構造並びにレキシコンに基づいている。したがって、それらのアクセント規則をより正確に適用させるためには、まずそれらの深層構造や表層構造およびレキシコン等をより正確に確定しておかなければならない。

最後に、これは一般的に言えることであるが、ある規則をたてると、必ずと言って良いほど例外が出てくる。もちろん、本稿で取り扱ったアクセント規則においても言えることである。普通は、それらの例外には特殊な素性を指定して、規則の適用を避けさせたり、またその例外のための特殊な規則をたてたり、²⁶⁾その都度場合に依じて処理している。

このことは、言語学が言語現象を客観的に観察・研究する学問であると言っても、言語現象が人間によって作り出されている以上、自然科学のように例外が全くないと言うことは、不可能であることを示している。

言語学は人文科学の分野でもかなり自然科学に近い学問であるが、²⁷⁾上述のことが自然科学との境界であるように思われる。したがって、例外も出来るだけ規則に取り入れて、例外を零に漸近させることが、我々の今後の課題であると言える。²⁸⁾

註

- 1) Kiprsky(1966)の用語。この語幹アクセント規則については、本稿の目的ではないので、触れないことにする。また、筆者の知る限りでは、ドイツ語の語幹アクセント規則を定式

化した論文はまだ見当たらない。なお、この語幹アクセント規則に相当する英語の主アクセント（強勢）規則（Main Stress Rule）については、Chomsky/Halle（1968）および今井（1971）を参照のこと。

- 2) 文のアクセントは多種多様で、さまざまな興味ある問題を含んでいるが、意味と密接に関連しており、本稿の枠内ではとても収まりきれないので、他の機会に譲ることとする。
- 3) (I)(i)~(IV)の4つの規則の名称は、Kiparsky（1966）よりヒントを得、各規則の働きを考慮に入れて、筆者が創作した。
- 4) 英語では、複合語規則（Compound Rule）および中核強勢規則（Nuclear Stress Rule）と呼ばれている（今井（1971））。また、この規則のドイツ語と英語との比較については、拙稿「複合語のアクセント — 英語と比較して —」（「ドイツ文学研究・第5号・1976年春」（東京教育大学大学院文学研究科独文学専攻）、1976）を参照のこと。
- 5) Handtasche は語のレベルにあるので、第2アクセントは第3アクセントに引き下げられる。この規則化については、第3章で述べられている。
- 6) 第3章で述べる副次アクセント弱化規則。語のレベルでのみ適用される。
- 7) 第4章で述べる副次アクセント交替規則。
- 8) 名詞、動詞、形容詞は語であるので、これらの複合語は、2つ（以上）の自由形態素の結合したものと考えて、()内の++が必要であるが、動詞句は2つ（以上）の語の結合したものであるから、()内の++は不要である。
- 9) 2組の<>は、()の異型で、共に行動することを示す。例えば、規則23(a)および(b)を参照せよ。
- 10) durch, ..., wieder は、非分離前つづり be, ..., zer, mißとは異なり、単独で語に成り得るし、したがってアクセント付けも異なるので、ここではこれら非分離前つづりと区別するために、「いわゆる」という意味で、括弧を付しておいた。
- 11) 拙稿「複合語のアクセント — 英語と比較して —」において、副次アクセント弱化規則について簡単に述べられているが、本稿ではそれより詳しく考察がなされている。なお、本稿では、この規則のドイツ語と英語の比較は取扱っていないので、それについては上述の拙稿を参照のこと。
- 12) 表層構造において、次の3つの型のうちの1つをTerminusと言う。（SはSatzという文法範疇を表わし、Xは分節素を含まず、Yは分節素も形態素境界記号も含まない。）
 - (a) [S # X { #
 - (b) # } X # } s
 - (c) # } Y { #

したがって、stehen bleiben は、それ自身の中に Terminus を持つことになる。

$$\left[\text{VP} \# \left\{ \underbrace{\text{V} \# \text{stehen} \#}_{\text{Terminus}} \text{V} \# \text{bleiben} \# \right\} \text{V} \# \right]_{\text{VP}}$$

- 13) ここでは、第2アクセントと第3アクセントが問題になっているので、einkaufen gehen の第4アクセントは spazieren gehen との比較の対象ではない。
- 14) 同様の例が、Kiparsky (1966) において、Handvoll Kirschen と Handvoll Kirschen のアクセントについて比較されている。
- 15) 本稿では取り扱わないが、この副次アクセントの交替は、文においても見られる。Kiparsky (1966) を参照のこと。
- 16) () はこの2つの () の中の記号列のうち、少なくとも1つは消去されないを示す。また、 $[-A]_0$ は任意個の $[-A]$ を示し、 $[-A]$ はアクセントのない分節素ないしは語境界記号か形態素境界記号を示す。
- 17) アクセント移行規則は、拙稿「前つづりのアクセント」(「ドイツ文学研究」第6号・1976秋)(東京教育大学大学院文学研究科独文学専攻)、1977)で定式化されているが、ここでは他のアクセント規則との関連についての補足的説明も加えて、より簡潔に改訂されている。
- 18) $[K]_0^1$ は0個か1個の子音を表わす。また、

$$/m/ = \begin{bmatrix} K \\ +nasal \\ -hoch \\ -koronal \end{bmatrix}, \quad /i/ = \begin{bmatrix} V \\ +hoch \\ -rund \\ -gespannt \end{bmatrix}, \quad /s/ = \begin{bmatrix} K \\ +obstruent \\ +dauernd \\ +frikativ \\ +anterior \\ +koronal \\ -stimmhaft \end{bmatrix}$$

であるから、規則(48)を厳密に規則化すれば、

$$[V] \rightarrow [1A] /$$

$$\left[\# + \begin{bmatrix} K \\ +nasal \\ -hoch \\ -koronal \end{bmatrix} \begin{bmatrix} +hoch \\ -rund \\ -gespannt \end{bmatrix} \begin{bmatrix} K \\ +obstruent \\ +dauernd \\ +frikativ \\ +anterior \\ +koronal \\ -stimmhaft \end{bmatrix} \right] ++ \# + [K]_0^1 \left[\begin{bmatrix} V \\ -A \end{bmatrix} X \right]_V$$

であるが、特に支障がないので、繁雑さを避けるために簡潔にした。

- 19) 規則(50)が簡略化されている理由は、18)に同じ、 $[K]_0$ は任意個の子音を表わす。また、規則(48)と比べて、規則(50)で最初の#+が1つずつ多くあるのは、この規則の適用を受ける名詞、形容詞が動詞の派生語であるからである。

- 20) いわゆる曖昧母音で、音声学では schwa と言う。
- 21) 規則 (53) で、 $[K]_0^1$ の左側に # が 3 つあるが、1 番目は派生語の語境界、2 番目は複合語の語境界、3 番目は基礎語の語境界である。また、1 番目と 2 番目の間の形態素境界に () が付してあるのは、派生語が派生語尾を持たない場合は、形態素境界が不要であるからである。
- 22) 副次アクセント弱規則は、ただ 1 度、語のレベルでのみ適用されるので、非循環規則であるが、他の 3 つのアクセント規則は、くり返し何度も適用出来る循環規則である。
- 23) ドイツ語には 5 語より成る複合名詞もあり、原則的には第 1 語に第 1 アクセントが置かれるが、出てくる例もあまり多くないので、本稿では触れないことにする。
- 24) die Übersetzung von Goethe は、von Goethe を die Übersetzung の Nominativ と考えるか Akkusativ と考えるかにより、次の 2 通りの意味を持つ。
- (a) Jemand übersetzt(e) Goethes Werk.
- (b) Goethe übersetzt(e) irgendein Werk.
- 25) gesamtdeutsche の g が大文字であるか小文字であるかは、正書法の問題であり、ここでは話し言葉のアクセントについて問題にしているので、無視して差し支えない。
- 26) 例えば、Riesenhunger, steinreich(ものすごく金持ちの), blutärmなどは第 1 アクセントを 2 つ持つので、これらにはアクセント段階規則は適用されず、次の規則が適用されねばならない。
- $$[V] \rightarrow [1A] / [X[1A]Y[1A]Z]$$
- 条件: X, Y, Z ≠ …… [1A] ……
- 27) 言語学の中でも、音声学は最も自然科学に近い学問で、例えば音声の周波数等を扱う場合は、音声学と物理学の学際領域(音声物理学または物理音声学)の分野に入り、双方の知識を必要とする。
- 28) ここで言う零に漸近するとは、無限に零に近づくが、有限では決して零には成らないことである。例えば、方程式 $y = \frac{1}{x}$ では $x (> 0)$ の値が大きくなれば、無限に零に近づくが、有限では決して零にはならない。

参 考 文 献

Baumgärtner, Klaus und Hugo Steger:

„Sprache I (Funk-Kolleg 12)“, Fischer Taschenbuch Verlag,
Frankfurt am Main, 1973

„Lehrgang Sprache“, Beltz Verlag; Weinheim und Basel, Max
Niemeyer Verlag, Tübingen, 1974

Bierwisch, Manfred:

„Skizze der generativen Phonologie“, In: Phonologische
Studien (Studia Grammatica VI), Akademie-Verlag Berlin, 1967

橋本文夫:

„詳解ドイツ大文法“, 三修社、東京、1956

今井邦彦:

„生成文法の音韻論“, In: 英語学大系 2・音韻論 II, 大修館、東京、1971

Kiparsky, Paul:

„Über den deutschen Akzent“, In: Untersuchungen über
Akzent und Intonation im Deutschen (Studia Grammatica VII),
Akademie-Verlag, Berlin, 1966

Kürschner, Wilfried:

„Generative Wortbildung I und II“, In: Baumgärtner und
Steger, 1973

„Generative Wortbildung I und II“, In: Baumgärtner und
Steger, 1974

Mayerthaler, Willi:

„Einführung in die generative phonologie (Romanistische
Arbeitshefte 11)“, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1974

Narr, Brigitte:

„Generative Phonologie I und II“, In: Baumgärtner und
Steger, 1973

„Generative Phonologie I und II“, In: Baumgärtner und
Steger, 1974

Wurzel, Wolfgang Ullrich:

„Studien zur deutschen Lautstruktur (Studia Grammatica
VIII)“, Akademie-Verlag, Berlin, 1970

Chomsky, Noam und Morris Halle:

„The Sound Pattern of English,“ Harper and Row Publishers,
New York, Evanston and London, 1968

(大学院博士課程)